

キリスト教保育とは何か

—— その子ども観と保育理論 ——

An Essay on Definition of Today's Christian Nurture

小 見 のぞみ*

要 約

本稿は、「作法」が伝承されているものの理論が確立されていないと言われるキリスト教保育をキリスト教リテラシーとして位置付けようとする試論である。

1節では、「キリスト教保育とは何か」の問いに、辞書的定義づけと日本のキリスト教保育史を概観することで回答する。続く2節では、キリスト教保育の原点となるイエスの子ども観を取り上げ、それが古代ギリシャ・ローマ世界の通念とも、ユダヤ教社会の観念とも異なる革新的なものであることを明らかにする。3節においては、18-19世紀のペスタロッチイ、フレーベル、ブッシュネルに焦点をあて、キリスト教保育論の根幹となる教育論、養育論について述べていく。

このようなキリスト教児童観、保育理論の源泉から今日至る思想の流れを神学的命題と関連付けて辿ることを通して、キリスト教保育の使命を明確化し、その働きの今日的意義を展望する。

キーワード：キリスト教保育の定義、イエスの子ども観、養育論

はじめに

「キリスト教保育とは何か」の問いが繰り返されている。キリスト教保育には、日本における幼児教育・保育の草創期から150年にわたり続けられてきた歴史があるにもかかわらず、その問いは常に古くて新しいものであるようだ。

これに対して、日本のキリスト教保育の実践を支える中心的役割を担ってきた一般社団法人キリスト教保育連盟では、1989年の『キリスト教保育指針』からほぼ10年おきに3つの保育指針を改訂刊行し、2018年には「キリスト教保育の本質的理論と実践を指し示す論説集」として『ともに育つ保育入門』を出版した。これらは、未信者や、キリスト教主義の養成校を経ずにキリスト教保育の担い手となる保育者が現場に急増している中で、キリスト教保育を次世代へ継承していくためになされている努力といえることができる。

また、日本キリスト教教育学会では、近年「キリスト教保育」分野の研究者が増加し、実践（流儀・

作法）はあるが理論（学）はないと言われることもあるキリスト教保育を理論的に位置付けようとする研究が継続的になされている¹⁾。これらのキリスト教保育をめぐる動向は、キリスト教保育が常に、それがなされる場において、主に設置者と保育者に対して、その目的や今日的意義ならびに実践を成文化・理論化・体系化する必要に迫られていることを示している。

そのような中で、初版発刊より半世紀が経過した『キリスト教大事典』を全面改訂する『新版キリスト教大事典』²⁾が編まれることとなる。全所収項目が見直される中、「キリスト教保育」は新項目となり、筆者が執筆を担当することとなった。これは、「キリスト教保育」を現代日本社会のキリスト教リテラシーの一つとして位置づけ、制限された字数内で辞書的に定義づける作業となった。この経験は、保育の根底にあるキリスト教理念や聖書神学のエッセンスを端的に書き表す必要性を改めて筆者に示すものとなった。

そこで本稿では、「キリスト教保育とは何か」の

* Nozomi KOMI 聖和短期大学 教授

1) 『キリスト教教育論集』27号 2019年 pp.104-108、『キリスト教教育研究』2020年参照。

2) 現在、日本基督教会が編集委員会を組織し編纂中、教文館より刊行予定。

問いに対して、1において、執筆した事典項目を紹介しながら、いわゆる辞書の定義づけと日本におけるキリスト教保育の歴史を概観することで回答を試みる。続いて1で要約したキリスト教保育の基盤理念のうち、2においてキリスト教保育の原点であるイエスの子ども観・キリスト教児童観について、3において18-19世紀の思想（ペスタロッツィ、フレーベル、ブッシュネル）について取り上げる。これにより、キリスト教保育の源泉と理想を明らかにしながら、それが今日も日々実践されるキリスト教保育とどのように結びつき、現代社会に如何なる意義と使命を持つのかを展望したい。

1. 「キリスト教保育」の定義と日本における歩み

「キリスト教保育」とは、キリスト教の理念に基づいて幼稚園、保育園、認定こども園等でなされる子どもへの教育、ならびに乳幼児期の子どもを保護して育てることをいう。特に日本では、この時期の子どもたちが保護や養護を必要とするという認識から、「教育」に比べ「養育」的意味合いの強い「保育」という用語を用いてこれを表している。つまり、キリスト教保育は、キリスト教の信仰や聖書に表された考え方（神学的概念）に共感し、その子ども理解に沿って乳幼児を養い育てようとする働きの総称といえることができる。

そこで、一般の幼児教育・保育とキリスト教保育との違いは、基盤とする考え方の違いにあるということになる。キリスト教保育は、キリスト教という宗教に基盤をおく組織（FBO：Faith-Based Organization）³⁾の働きである。そこで、その理解には、それが依って立つ Faith、すなわちキリスト教神学や理念を知ることが必要不可欠となってくる。そして、その中心的命題はキリスト教保育の原初でもある福音書に記されたイエス・キリストの子ども理解ということになる。

イエスの子ども理解と子どもへの姿勢は、イエスが子どもを祝福された記事（マルコ10：13-16、マタイ19：13-15、ルカ18：15-17）に代表され、キリスト教児童観の中核をなすものとして、子どもに対する教会と世界の教育的使命を明示する。すなわち、イエスに倣って子どもを受容・肯定し、み国に

入る者として信仰者の模範とみなし、神とイエス自身の臨在を表す「いと小さき者」である子どもを愛と配慮をもって育てることが、キリスト教保育の原点なのである。

しかし、2000年以上前の古代社会で顕された、このようなイエスの革新的子ども理解は、それ以降長年にわたり顧みられることなく聖書の中に封じられた。それが、ルネサンス期にいたってルソーの「子どもの発見」に始まり、ペスタロッツィ、フレーベルらによる近代ロマン主義的子ども観の中に再生の時を迎え、1840年、世界最初の幼稚園が誕生、幼い子どもへの教育、キリスト教幼児教育が開始されたのである。

ここで言及すべきは、キリスト教保育が当初より有した二つの関心事についてである。フレーベルの幼稚園創立に先立ち、プロテスタント教会の牧師であったオベルラン（Jean Frédéric Oberlin）は、仏アルザス・ロレーヌで貧困家庭の子どもを昼間保育を開始し（1779）、パリではマルボー（Firmin Marbeau）が女工の子どもたちの保育施設を創っている（1744）。つまり、キリスト教保育は、その創始から幼児・幼稚園教育と保護を目的とする保育という二つの方向性を包含し、その実践は児童福祉と養護の観点を最初の動機としているということである。

このようなキリスト教保育が創始、形成されていく19世紀には、キリスト教保育を基礎づける主要な理念がすでに打ち出されたと考えられ、それらを基盤として日本のキリスト教保育理論と人間観・教育観は構築され、特徴づけられたと思われる。その中で特に重要と思われるのは、①手・心・頭の調和的発達による全人的人間観を示し、子どもの直観と体験を重視し、人格的關係の中で信仰、愛、感謝、信頼などを培う必要性を説いたペスタロッツィ、②乳幼児期の子ども存在と子どもの自発的な「遊び」に高い価値を認め、自らは子どもと遊ぶ「馬鹿爺さん」と周囲に呼ばれながら、子どもの園を創りだすことに専心したフレーベル、③親子の有機的一体性に注目し、愛情深く温かな家庭的雰囲気、キリスト教的「環境」において信仰は養い育てられるとしたブッシュネルであり、詳細を後述する。

このように、西欧で始まり米国でも独自の展開を

3) 日本社会における「宗教に基盤をおく組織」（FBO）については、小見のぞみ「ソーシャル・キャピタルとしてのキリスト教保育」『キリスト教教育研究』日本キリスト教教育学会、2020年、pp. 237-243参照。

遂げたキリスト教保育は、主に米国を経由して日本へともたらされ以下のような歴史をたどっていく⁴⁾。

日本におけるキリスト教保育は、封建的父権社会の中で抑圧されていた女性、母親の人権擁護、子どもたちの福祉と深く結びついて、明治期に女性宣教師らによって開始された。1871年横浜に開設されたアメリカン・ミッション・ホーム（亜米利加婦人教授所）の当初の目的は、日本人女性と外国人との間にできた子どもを養育することだった。つまり、日本のキリスト教保育は、西欧諸国における最初の保育事業と同様に、児童福祉・保護の視点から始まっている。キリスト教保育は、個の人格や尊厳を認められなかった女性、子どもという社会的弱者に注視し、その人権擁護を当初の動機として実践されるようになったのである。

一方、日本初の幼稚園は官立の東京女子師範学校附属幼稚園（1876）であるが、これを創設した中村正直や園で働く保母たちは、キリスト教と女性宣教師から強い影響を受けていた。日本のキリスト教幼稚園の嚆矢とされるのは、共に1880年開設の桜井女学校附属幼稚園、ブリテン女学校幼稚園で、1886年に金沢に開設された英和幼稚園（現・北陸学院第一幼稚園）は現存する最古の私立幼稚園である。以後各地に広まり、1896年までに33園が開設され、1889年には神戸に頌栄保母伝習所（現・頌栄短期大学）が創立され保育者養成もなされていった。

キリスト教保育のもう一つの流れである、子どもへの福祉・保護の働きは、1887年、石井十次が後の岡山孤児院となる日本孤児教育会を開設し、各地で「孤児」や「混血児」のための施設や、生活困窮地区、被差別地区での保育施設、無料幼稚園等が開設された。1920-30年代には、親の困窮や労働状況にあわせた農繁期託児所、災害時託児所などの取り組みがみられ、社会の周辺、底辺にある人々へのアウトリーチは、その開始から常にキリスト教保育の主要な関心事となった⁵⁾。

その後キリスト教幼稚園は、1935年には全国の私立幼稚園1324園のうち519園をキリスト教幼稚園が占めるなど、戦前大きく成長した。この間、1906年

に A. L. ハウが会長をつとめ、女性宣教師を中心に JKU: Japan Kindergarten Union が組織され、1931年日本人のリーダーシップを主とする基督教保育連盟（現・キリスト教保育連盟）へと引き継がれた。

日本のキリスト教保育は、明治期の創設当初はフレール主義により、恩物を用いるものが主流であった。そこへ国内的には大正デモクラシーと新教育運動の潮流が、海外、主に米国からは自由主義神学、経験主義・進歩主義教育の波が訪れた。それらの影響を受け、1920年代には自由保育を導入する園や、心理学、教育学の科学的知見を取り入れ、発達段階を考慮したナースリー（3歳児保育）を開設する園が現れるなど、近代的幼児教育の型が整えられていった。

しかし、1930年代に入り、天皇制国家主義・軍国主義教育が保育においても強い影響力を持つようになる。40年代には、園での宮城（皇居）遥拝が日常化され、軍・兵士への慰問など戦争協力が積極的になされたほか、園児疎開、建物疎開による園舎の消失、空襲等により、休園・廃園を余儀なくされる園もあった。

戦後のキリスト教保育は、民主的な教育を願う保護者や社会からの強い要請を受け、また、教会の地域伝道を担う重要なアプローチとして位置付けられ、教会附属の幼稚園、保育園の開設が相次いだ。神学的には、新正統主義神学（弁証法神学）が教会を席捲するなか、キリスト教保育の目的の中に、信仰者である保育者によって幼児をキリスト（神）へと導くことが据えられ、園は子どもと家庭への伝道の手段としてとらえられるようになった。

しかし、1970年代後半より、宗教法人であった教会附属幼稚園の学校法人化が進み、保育園においては市町村からの措置児童の受け入れに伴い、経費の大半が公費助成によってまかなわれるなか、国の保育政策への対応、保育の公共性の担保が求められるようになった。その後も世紀を超えて、社会の急激な変化は進み、子育て家庭のニーズが多様化するなか、キリスト教保育を担う保育者のうち信者の占める割合の減少が続いている。これに伴い、従来「キリスト教信仰への教育」と位置づけられてきたキリス

4) キリスト教保育連盟の出版する『日本キリスト教保育百年史』1986年、『キリスト教保育125年—日本キリスト教保育百年史—』からの動向』2014年、『新キリスト教保育指針』2010年参照。

5) これらの取り組みの事例として、聖和史刊行委員会『Thy Will Be Done—聖和の128年—』関西学院大学出版会、2015年、「欧亜混血児全日制学校」p. 154、「農繁期託児所保母講習会」「風水災地愛護幼児施設」pp. 220-222参照。

ト教保育は、「キリスト教の理念に基づく養育」へと重心を移し、信者・未信者の協働において実践されている。

2. イエスの子ども理解（キリスト教児童観）とその展開

本節では、キリスト教保育の基盤となるキリスト教の児童観ならびにその中核であるイエスの子ども理解について述べていく。併せて2000年以上前に表された子ども観が、キリスト教保育においてどのように継承されてきたかを概観する。

キリスト教児童観、子ども観とは、児童に対するキリスト教の見方を指すものである。このキリスト教児童観は、キリスト教人間観の一部であるが、子どもに焦点を絞ることで、また、「子（ども）」が神学的に極めて重要な表象であることのゆえに、キリスト教の人間理解を闡明する理論だといえることができる。

キリスト教人間観は、大きく分けて三つの観点をもつ。その第一は、「神の像^{かたち}」として神によって創造された人間である。これは人間が、「神にかたどって」「極めて良い」（創世記1:27, 31）もの、神に創られ祝福された存在であることを示している。この人間観が、ありのままの子ども、存在そのものが神によって受容され、愛されているという子ども観につながっている。

第二は、同じく創世記に描き出された、墮罪して罪の中にある人間である。これは、「義人は一人もない」（ローマ3:10）という人間理解であり、ここから、すべて人は罪の中に生まれた者として、幼子や子どもも悔い改めと救いを要するという理解がなされていく。この理解は、キリスト教保育において子どもを罪人の一人として捉える子ども観や、保育を未信者（子ども・家庭）に救いをもたらす宣教・伝道の業として位置付けることにつながっている。

第三の見方は、聖霊により、恵みによって新たに神との関係に生かされた人間である。罪の中に生まれた人間は、キリストの救いに与ることで、新たな生を生きる存在となると理解される。ここから、キリストにある生き方、神の恵みによって生きる人間

の在り方、すなわち「キリスト教倫理」が追及されることになる。この人間観は、保育において「光の子らしく歩む」（エフェソ5:8）といった形で表現され、神に喜ばれる生活の勧めにつながっていく。

これら三つの観点には、相反すると思われるような人間理解が含まれており、神学的強調点をどこに置くかによって、また、キリスト教保育をはじめとして何と関連付けるかによってさまざまな見方が成り立つことになる。また新約には、幼子は愚かさや未熟を象徴し、成熟すべき存在であるとするパウロの児童感も並存している。このような中で、キリスト教保育において最優先すべきは、聖書に表されたイエスの子ども理解に依拠することだといえる⁶⁾。

イエスが生きたユダヤ社会では、子どもの誕生は喜びの出来事とされ、子どもは神の祝福の象徴であった。これに対して新約におけるイエスの子ども理解は、そのようなユダヤ教の子ども観とも、また、当時のギリシア・ローマ世界における有用性に基づく子ども観とも全く異なるものであり、それらの子ども観を根底から覆すものであった。イエスは、子どもをありのままに神に受容され祝福されみ国に入る者の象徴とし、信仰における大人の模範とみなしたのである。

しかし、その後の子ども理解をめぐる歴史は、子ども存在自体を不問に付してしまう。古代に表明されたイエスの子ども観は、1700年以上の時を経て、近代における「子どもの発見」として再生する。ここから、ペスタロッツィやフレーベルらは、児童の中に神性が内在する〈児童神性説〉として近代ロマン主義的子ども観を提唱した。これはイエスの子ども理解を再現しつつ、第一のキリスト教人間観の強い主張と重なって、自由主義神学に立つ楽観主義的人間観を生み出した。そしてここに、キリストにある新たな人間という第三の見方を加え、それらを基調とする宗教教育理論が広まり、宗教教育運動と呼ばれる一大ムーヴメントがキリスト教教育界を席捲したのである⁷⁾。

そのような楽観主義的理想的人間観に対して、二度にわたる世界大戦の事実は、人間の素晴らしさや被造物としての卓越性に大きな疑問を投げかけるこ

6) 様々なキリスト教の子ども理解の中で何を優先するのかについての筆者の考えは、拙著『田村直臣のキリスト教教育論』教文館、2018年を参照されたい。田村は、あくまで「キリストの子ども観」にのみ注目し、「児童中心のキリスト教」の概念を打ち出している。

7) 日本における自由主義的宗教教育理論については小見（2018）、pp. 380-398参照。

となる。第二次世界大戦をはさんで新正統主義神学（弁証法神学）が世界的に台頭し、第二の人間観が示す人間の罪性、問題性を鋭く指摘したのである。日本においては主にこの人間観に立つバルト神学が強い影響力を持ち、特にプロテスタント教会において、救われるべき罪人である人間への「神の言」の宣教こそ最も優先すべき事柄とされていく。これはキリスト教教育・保育においては、聖書至上主義的な知育や教育の伝道的機能の偏重という形をとっていった。

しかし、第二の人間観は、極めて悲観的人間観であり、また、そもそも幼児の罪の悔改めや信仰告白は可能なのかという議論も相まって、特にキリスト教保育の分野では、それほど浸透は見られなかった。これは、宣教中心主義の神学を掲げる教会の人間理解と、教会付帯施設であるキリスト教主義園のそれとが異なることを意味する。これにより、教会と園の教育・保育の目的や方法が徐々に乖離する傾向があったと思われる⁸⁾。

そこに、19世紀末以降の児童心理学の発展による人間の発達論的理解や、20世紀の社会文化的アプローチによる教会教育論的理解⁹⁾なども加わり、キリスト教の子ども観には多様な表現が現れた。中でも注目したいのは、1979年「国際児童年」前後に相次いだ福音書研究に基づくイエスの子ども理解の聖書学的解釈である。その中から、イエスの子ども理解に今日的な光をあてる二論考を以下に要約する。

◆ハンス＝リューディ・ウェーバー『イエスと子どもたち』¹⁰⁾

本著は、世界教会会議（WCC）の聖書研究部門の幹事であった H.R. ウェーバーが、「イエスと子どもたち」に関する福音書の探究、聖書研究のために著したもので、付録にワークシートが付けられ、聖書テキストを学ぶことができるガイドブックでもある。ウェーバーはこの中で、子どもに対するイエスの態度からわたしたち大人が学ぶための「イエスと子どもたち」に関するテキストは、福音書に僅か

しか存在せず、しかも「決して分かりやすいものではない」と述べている。そして、先述の子どもを祝福するイエスの記事に加え、広場で遊んでいる子どもたちのたとえ話（マタイ 11:16-19、ルカ 7:31-35）、弟子たちの真ん中に立たせられた子ども（マルコ 9:33-37、ルカ 9:46-48、マタイ 18:1-5）を取り上げ、詳細なテキスト研究を行い、そこから以下のようなイエスの子ども観を浮き彫りにするのである。

イエス時代のギリシア・ローマ世界の子ども観は、国家や社会の将来的担い手として効用があるかどうかという、いわば有用性のみで計られていた。「子どもは、これから形成され、教育されるための『原料』と見なされ」¹¹⁾、子どもの現在は顧みられることなく、未来社会に不用とみなされれば、子捨てが当然のようになされていたのである。

これに対して、ユダヤ世界の子ども観は、あくまでも神中心的な視点で計られていた。子どもは、神の民イスラエルの繁栄のために、神から与えられた祝福の賜物であり、民族を保守、継承していくという一事において大切にされた。そこで子どもは神の民、ユダヤ教徒として律法（トーラー）に沿った生活者となるように、両親にゆだねられた存在であった。つまり子どもの価値や重要性は、神との関わりと律法への関心という文脈の外には一切認められなかったのである¹²⁾。

そのような社会状況とユダヤ教的通念のなかで、イエスは子どもが成人となった場合に予測される付加価値や有用性、ならびに神と律法への関心からではなく、子どもそのものの現実を注視した。イエスは、広場で拗ねてすぐに遊びを台無しにしてしまう普段の子どもたちの姿を描写することで、子どもをめぐるロマンティズムや理想化を排除している。子どもは、イエスにおいて決してイノセンスな存在ではない。にもかかわらず、そのあるがままの子どもをイエスは受け入れ、神の国と結びつける。どんな功績もなんの条件もなしに、その絶対的な弱さのゆえに、子どもはただイエスに受容されるので

8) 同様の現象は教会教育にも見られる。小見のぞみ「教会教育と子ども—日本の教会は子どもたちを招いてきたのか」富坂キリスト教センター『紀要』第9号、2019年参照。

9) 代表的理論にウェスターホフが提唱する信仰共同体によるエンカルチュレーション（文化化）がある。J.H. ウェスターホフ『子どもの信仰と教会』新教出版、1981年、参照。

10) ハンス＝リューディ・ウェーバー『イエスと子どもたち』新教出版社、1980年

11) ウェーバー（1980）、p. 80。

12) ウェーバー（1980）、pp. 33-40。

ある。

さらにイエスは、一人の子どもを弟子たちの真ん中に置くことで、子どもを「教えを受ける」、「しつけを受ける」存在から、大人たちが見習うべき模範へと転倒させる。「誰がいちばん偉いのか」という弟子たちの問いは、子ども、すなわち「小さい者」(ミクロイ)によって答えられる。こうして子どもは、「最も小さい者のひとり」を代表する者として、神とイエスの隠れた姿を写す存在となつて、教会に提示されたのである。

以上のような、ウェーバーが解釈するイエスの子ども理解は、先述の三つの人間観の再考を迫るものとなる。第一の人間観に関して言えば、イエスはありのままの子ども存在の価値を認めているが、そこに18世紀のロマン主義的、無邪気で無垢な子ども観は微塵もみられない。イエスは、子どもを極めてリアリスティックに捉え、あるがままで受容されたのである。

また、福音書の記事をみる限り、第二の救われるべき人間／子どもという理解は、イエスにおいてなされていないことは明白である。贖われるべき罪人である子どもという理解は、福音書のイエスの言動には全く認められない¹³⁾。

第三の、神の恵みの内に生きる新しい存在としての人間観に関して、イエスはその最も顕著な特性を「小ささ」として子どもの姿から示している。この世で最も弱く小さい者こそが、神の国の中心にあり、神とイエスを表しているとするので、イエスは神の恵みに生きる者のあり方を、「仕える者・僕」の姿として明らかにしているのである。

◆W・シュテージェマンによるマルコ福音書10:13-16の社会史的解釈

「イエスと子どもたち」の福音書記事のなかで、最も中心的で伝承史的にも最古とされるのがマルコ福音書10:13-16である。ここからは、この箇所を絞って、ヴォルフガング・シュテージェマンの社会史的解釈が読み解くイエスの子どもに対する理解と使信について、今井誠二の訳出、著述から述べていく¹⁴⁾。

シュテージェマンは、「子どもたちの福音」の中で、マルコ福音書においてイエスは神の国を「そのような者たちのもの」と述べていることに注目する。そして、連れてこられた子どもに代表・象徴される「そのような者たち」とは、当時の社会において、大多数を占めた絶対的貧困層(プーコイ)の人々であったと推察するのである。このように社会史的な文脈を確認した上で、最古の伝承であるマルコ10章のイエスの言葉を読むとき、「子供のように」の解釈が問題となってくる。

子どもたちを、私のところに来させよ。子どもたちを妨げるな。なぜなら神の国はそのような者たちのものだからだ。アーメン、私はあなたがたに言う。子どもを受け入れるように神の国を受け入れる者でなければ、神の国には入れない。(傍点筆者)

マルコ福音書10:14b-15:今井誠二私訳

15節は、これまで「子供のように神の国を受け入れる人でなければ、決してそこに入ることはできない。」(新共同訳)と訳されてきたが、上の私訳では、傍点を付した部分が従来と異なっている。ギリシャ語の原文には、ホース・バイディオ「子どものように」とだけあり、文法上二つの訳出が可能となる。①「子どもが受け入れるように」と、子どもを主格とするものと、②「子どもを受け入れるように」と子どもを対格にする場合である。子どもが主格なのか対格なのかは、文法上どちらも訳出可能であり、いずれであるかは文脈から判断するしかない。

そこで、従来多くの解釈は、「子どもが受け入れるように」と、子どもを主格とすることで、子どものある特性が、大人が見習うべき模範であるという読み方をしてきた。そして、そのような従来の翻訳の下で、子どもの特性は、全幅の信頼を寄せて他者を受け入れる姿や、究極の謙遜性などと考えられてきたのである。しかし、イエスは、子どものどのような姿が模範だと思っておられたのだろうか。子どもが持つ普遍的特性を、この文脈一連でこられた子どもが招かれるという場面一から見定めるのは、

13) 田村も「ナザレのイエス」から同様に子どもを理解する。小見(2018) pp.410-412。

14) ヴォルフガング・シュテージェマン(今井誠二訳)「子どもたちを私のところへ来させなさい—社会史的視点から見た『子どもたちの福音』—」『人間学論究』尚絅学院大学大学院総合人間科学研究科、2018年。今井誠二「子どもを受け入れるイエスマルコ福音書における貧困と子ども」『奪われる子どもたち』、教文館、2020年。

非常に難しいと言わざるを得ない。

これに対し、シュテューゲマンは、「子どものように」と言われるものは、子どもが一般的に所持している何らかの特性を指したのではなく、かえってある階層に属する子どもを指していると読む方が自然だとするのである。度重なるローマへの抵抗戦争に敗れ、ローマ帝国の圧政のもと、絶対的貧困層が溢れていた社会の中で、受け入れるようにイエスが言われたのは、そのような貧しい者たちではなかっただろうか。シュテューゲマンは、「孤児なのか、捨て子なのか、それ以上扶養できなくなった子どもたちが連れてこられたのかは判断できないにせよ、問題になっているのは、寄る辺のない子どもたちの受け入れであることは明白である」としている¹⁵⁾。

つまり、この箇所は当時の社会的状況から見て、文脈上「子どもを受け入れるように」と、子どもを対格として読むべきであり、ここでのイエスの主張は、プトーコイ（絶対的貧困層の人々）、寄る辺ない・最も小さい者たちの代表、象徴として、誰の保護も受けられない子どもたちの引き受けを意味していると考えられるのである。イエスはここで、そのような寄る辺のない子どもたち「小さく貧しい者」が祝福され、そのまま全面肯定され、受容される共同体こそが地上における神の国の実践・実現であると述べていると解釈する時、そこにイエスの示す神の恵みにある人間の生き方・人間観があらわれてくる。子どもたちに関するイエスの教えは、キリスト教保育の今日的使命、方向性を宣明しているのである。

3. 創成期のキリスト教保育論—その潮流が示すもの

ここまで述べてきたイエスの子ども理解に根ざしたキリスト教保育は、今日どのような教育論、保育論として言い表せるのだろうか。それは、教育論のなかでも特に「養育」という特徴をもち、18-19世紀のキリスト教保育の創始から創成期にすでに、理論の骨幹が作られていたと考えられる。そこで、本節ではキリスト教保育論の主要な理念を提唱したペスタロッツィ、フレーベル、ブッシュネルについてその人物を概観し、その思想に見られる神学的命題

を考察する¹⁶⁾。

◆ペスタロッツィ Pestalozzi, Johann Heinrich (1746-1827)

ペスタロッツィは、子どもたちの教育の実践者でありつつ、教育思想家・著述家として教育・保育を理論として著した人物である。

彼は、スイスのチューリヒに生まれ、5歳で父を失い、母と家政婦の養育を受け、牧師であった祖父の感化でチューリヒ大学では神学、法律学を学ぶ。学生時代にルソーの影響を受け、理想主義的な社会改革を掲げて学友らと〈愛国者団〉を結成し、民衆解放運動に参加する。1768年農業に転向、ノイホーフで農場経営を開始し、翌年団員であったアンナ・シュルテスと結婚。ルソーの『エミール』に基づいて自分の子どもを教育しようと試みるが、その理論は実践的でなかったため独自の子ども研究を進めることになる。1774年、妻と共に近隣農家の貧しい子どもたちの労働教育施設〈貧しき者の家〉を開設するも、経営難により5年で閉鎖を余儀なくされる。その後20年間は著作執筆に専念し、ルソーの自然主義を色濃く映した『隠者の夕暮』（1780）、ノイホーフでの教育経験を記した『リーナハルトとゲルトルート』（1781-87）でその教育思想の根本を示し、国内外から注目をあびる。その後ふたたび教育実践に戻り、1798年シュタンスにおいて、政変と動乱のために親や家を失った子どもの家庭孤児院を開き、その経験を『シュタンス便り』（1799）に公表。更にブルクドルフ、ミュンヘンブーフゼーでの学校教師を経て、『メトーデ』（1800）、『ゲルトルートはいかにその子を教えるか』（1801）を公刊し、カントに依拠しつつ直感にこそ教育の基礎があるとする方法論を体系化する。1805年イヴェルドンに学園を開き、自らの教育理論を実践、学園は世界的に脚光をあび、F. フレーベル、J.G. フィヒテ、J.F. ヘルバルト、R. オーウェンなど名だたる見学者が訪れる。しかし学園の協力者、教師間に不和が生じ、1825年自ら身を引いてノイホーフに帰り、生涯の教育思想を叙述した自伝『白鳥の歌』（1825）を執筆、2年後にブルックにて病没した。

ペスタロッツィは、18-19世紀、社会の激変から

15) 今井 (2020)、pp.195-196

16) 本節の記述は、注2の『新版キリスト教大事典』において小見が執筆した項目（ペスタロッツィ、フレーベル、ブッシュネル、養育論）をもとに加筆修正している。

生み出された孤児や貧困に苦しむ子どもたちの危機的状況に対して、イエスからルソーへと続く子ども観に依拠して、従来型の言語主義的な教育方法を廃し、自らの実践を通じて新たな教育思想を打ち立てた人物といえる。彼は、教育的努力によって社会は再生されると主張した。捨てられた子どもたちを放置するのではなく、保育・教育を施すことによるのみ、社会は変革されると考えたのである。

ペスタロッチの教育理論で特に注目すべきは、手 (hand 意)・心臓 (heart 情)・頭 (head 知) の3つの調和的発展による全人教育の提唱である。これは、教育を知育偏重から解放する思想であり、キリスト教主義教育、キリスト教保育の主要な理想、教育がめざすべき人間像となっていた。

三つのHの中でも彼は、心臓の教育、とりわけ気高い心 (道徳性) の育成を重んじ、そのためには「信仰」、「愛」、「感謝」、「信頼」が人格的關係の中で培われるべきこと、それらは子どもの自己活動 (主体的行動) において、直感的に体得、経験されるものであることを説いている。これらの思想は、今日に至るキリスト教保育の人間観、理念の中核を示すものとなっている。また、「愛ある家庭で子どもは神を知る」として、保育における家庭と家族の重要性に着目している点も、その後のキリスト教保育論の特徴を表すものである¹⁷⁾。

◆フレーベル Fröbel, Friedrich Wilhelm August (1782-1852)

ドイツの教育家、幼稚園の創始者、乳幼児への教育の開拓者。1782年旧東ドイツのテューリンゲンでルーテル派牧師の6番目の息子として生れ、9カ月で母を亡くし、不遇な幼少期を故郷の自然と僅かな人々の愛情、神への信頼を支えに過ごす。イエナ大学で学んだ後、23歳で建築家をめざすも、あるきっかけから模倣学校の教師となり、2年間スイスのイヴェルドン学園でJ.H.ペスタロッチに教育を学ぶ。その後ゲッティンゲン大学で教育の基礎となる自然科学研究に没頭したフレーベルは、「球体法則」を鉱物や結晶の世界に見出し、研究を進めるためベルリン大学へ転学。彼の教育思想は、F.シェリング、F.シラー、J.G.フィヒテに影響を受け、自然に内在する神的法則を創造的根源力とする独自の世

界像を根幹とし、それによる個人精神の覚醒、発展をめざすものである。対ナポレオンのドイツ解放戦争に従軍した後、ベルリン大学で鉱物学助手を務める中、長兄の死に伴い兄の遺児を中心に、1816年故郷テューリンゲンのグリースハイムに小学校 (一般ドイツ教育所) を開設する (翌年カイルハウに移転)。主著『人間の教育』はその実践に基づいている。その後、一時スイスでカイルハウ小学校になりつついくつかの学校を創設するが、37年ドイツに帰国し、ブルクドルフ孤児院長に就任。幼児期の教育と母親教育の重要性を痛感したフレーベルは、1839年ブランケンブルクに〈遊戯および作業教育所〉を設立、遊戯指導者養成コースも併設し、1840年この場所を子どもたちの園 Kindergarten (幼稚園) と改名、世界最初の幼稚園が誕生する。ドイツ観念論、ロマン主義の影響を強く受け、万有内在神論に立つフレーベルは、自発的な遊びと作業を通して子どもの中に宿る神性を発揮させることを願い、恩物 (Gabe) と呼ばれる遊具・玩具を考案したほか、母親のための教科書『母の歌と愛撫の歌』(1844) を出版する。しかし1850年、プロイセン政府は突如「幼稚園禁止令」を発布し、すべての園は閉鎖される。再開を求める嘆願が聞き入れられない中、1852年マリエンタールにて70歳で没した。

彼の死後、幼稚園は世界中に広まり、日本ではキリスト教を基盤とするフレーベルの幼児教育思想が宣教師によって紹介され、乳幼児の保育がフレーベル主義により、恩物を用いて始められていった。フレーベルは、万物は神が統一する永遠の法則の働きによって成り立つとし、人間ならびに幼児もこの神聖な永遠の法則を宿しているため、幼児の本性も神聖であり、絶えず生成発展する創造的なものであると捉えた。彼の子ども観は、神学的、観念的概念に基づいていたため難解であり、その世界観と思想が埋め込まれた恩物を用いて保育を実践することは、現場の保育者にとって難易度の高いことであったと考えられる。

しかし、フレーベルが幼児期の「遊び」こそ、子どもの未来の全生活の子葉であると述べ、人間の生涯の源泉が幼児期にあると主張したことは、今日に至るキリスト教保育の原点となっていることは言うまでもない。フレーベルによって、乳幼児期の子ども

17) 主著『ペスタロッチ全集』全13巻、長田新編、平凡社、1959-60年。

も存在に光があてられ、子どもの園である幼稚園が創設され、子どもの「遊び」に極めて高い価値がおかれることになったのである¹⁸⁾。

◆ブッシュネル Bushnell, Horace (1802-76)

米国会衆派教会牧師、アメリカ自由主義神学の第一人者で、近代宗教教育の父と呼ばれる。ブッシュネルは、米国ニューイングランドのコネティカット州バンタムで、主に農業に従事した両親の下、6人兄弟の長子として生まれ、信仰深い母の影響を受けて育つ。リッチフィールドのエピスコパル派教会で幼児洗礼を受け、ニューイングランドの伝統的なカルヴィニズムからは距離をおいて幼少期を過ごす。ニュープレストンへの移住にともない、カルヴァン主義の会衆派教会に移り、19歳で信仰告白。1823年、イェール大に進み、S. T. コールリッジ、F. シュライアマハーの著作から強い影響を受け、ロマン主義的観念論に親しむ。卒業（1827）後、一時ニューヨークでジャーナルの編集に就くが、法律を志し、イェール・ロースクールを卒業、弁護士試験に合格する（1831）。しかし、同年大学を席捲したりバイバル運動の中、イェール大神学部へ入学し、回心経験を経て牧師への道を進む。卒業後、コネティカット州ハートフォードの北会衆派教会の牧師となり（1833）、健康を害して退職する（1859）まで、26年間一教会を牧会する。この地域教会における実践から構築されたのが、主著『キリスト教養育』（1861）ならびに『キリストにおける神』（1849）、『自然と超自然』（1858）などの神学書であった。The Holy Spirit（未完）の執筆中、1876年に没した。

ブッシュネルの著作と思想の中でキリスト教保育理論に最も大きな影響を与えたのが、『キリスト教養育』*Christian Nurture*（1861）¹⁹⁾である。その冒頭に、ブッシュネルは、「子どもはキリストチャンとして成長すべきであって、決してそれ以外のものとして自己自身を知るべきではない」との主題を掲げる。当時ニューイングランドは、J. エドワーズらによる第一次信仰覚醒運動（1740年代）に起因する神の主権と人間の全的墮落を強調する教義により、聖

霊による回心経験以外に救いはないとされ、それが子どもにも適用されたため、回心前の信仰教育は家庭でも教会でもなされていなかった。ブッシュネルはこれを強く非難し、自由主義神学の立場から、子どもに幼児洗礼を受けさせ、キリスト教信仰の中で育てるキリスト教養育を提唱したのである。

ブッシュネルは、霊的経験を重んじ回心を否定しないが、成長するまで罪の中に子どもを放置することは、子どもの信仰を育てるべき親と教会の責任放棄であるとして、それを無慈悲で冷酷な「ダチョウの養育」と呼んだ。そしてこれに代わる家庭養育を提案し、「小さな教会」である家庭において、親子の organic connection（有機的一体性）を通して、神の恵みが子どもにもたらされ、宗教的人格形成がなされる家庭伝播こそ重要であるとした。

この著作には、聖霊がもたらす愛情深く温かな家庭の雰囲気（環境）の中で、親の信仰と祈りの模範を示しながら、子どもの心をくじくことなくケアすることで子どもはよいものとして生長すること、教会が幼児洗礼とその後の教育を施すことよって子どもは信仰に導かれることなど、近代的アメリカ的宗教教育理論の基礎が述べられている。加えて、乳幼児期の可塑性や成長過程の漸次性に基づく養育、教育への言及がなされ、発達段階に応じた教育のあり方が提案されているほか、子どもに備わっている遊びの本能は神の備えたものであり、遊びは「キリストチャンの自由の象徴」とし、子どもの「遊び」や「祝い」、「身体性」に注意が向けられるなど、保育学的示唆に富むものとなっている²⁰⁾。

19世紀の「最もアメリカ的な神学者」とされるブッシュネルによるキリスト教養育論は、米国の近代教育思想と宗教教育理論の中心となり、希望に満ちた教育モデルとして宗教教育運動へと発展した。これが主に米国からの宣教に依っていた日本のキリスト教界に入り、大正自由教育の潮流の中、キリスト教保育は、フレーベル主義一辺倒を脱し、自由保育を取り入れていくことになったのである。

しかし、ブッシュネルの養育論は、親や家庭の祈り、信仰深さなどがその成立条件であったため、米

18) 主著『人間の教育』（岩崎次男訳；1960、小原国芳訳；1965）。小原国芳・莊司雅子監修『フレーベル全集』全5巻（1977）。

19) *Christian Nurture*, 1861: H. ブッシュネル（森田美千代訳）『キリスト教養育』教文館、2009年。

20) 小見のぞみ「H. ブッシュネル『キリスト教養育』解題からの考察—今日のキリスト教保育理論の形成に向けて」『聖和論集』第38号、2010年、ならびに小見のぞみ「H. ブッシュネルの思想と現代的意義（1）、（2）」『キリスト教保育』10月号、11月号キリスト教保育連盟2015年、参照。

国においても実践は難しいものだった。クリスチャンホームがほとんど形成されていない日本では、保育の場がそれに代わるものとなることが目指されたが、保育者への要求の高い理念であったことは言うまでもない。そこに20世紀初頭、新正統主義神学が台頭し、キリスト教教育は「家庭と養育」から「教会と教授（教育）」へと関心を移す。こうして、子ども中心（子ども本位）思想や楽観的人間観に基づく子どものイノセンスは低められ、神の超越性、人間の罪性、恵みによる救いに強調点がおかれることになったのである。

しかし、新正統主義神学とそれに基づく教育論も無論完全ではなく、その後、養育論は20世紀終盤に再認識され、「キリスト教的人格形成と陶冶としての養育」など多様な理解と表現がなされている。こうして、現在、キリスト教養育論は、ブッシュネルのそれと全く同一ではないものの、キリスト教教育・保育の基盤となる重要な概念として21世紀の理論形成に深く関わるものとなっている。

終りに

ここまで述べてきたキリスト教保育の理論的基礎となるイエスの子ども観と、保育が開始された18-19世紀の主要なキリスト教乳幼児教育論が、キリスト教保育理論の未来に示唆することがらについて、最後に二点あげておきたい。

第一は、キリスト教保育の定義づけにおいて、「教育」より強調されている「養育」の側面に注目し、現代のキリスト教養育論を建てることである。そもそも、一般的に使われる nurture 養育は、ラテン語の *nutrire*（乳を飲ませる、養う）に由来し、母親が赤ちゃんを抱いて育てる姿に象徴されるように、養い育むことを重視する言葉である。ここで大切なのは、養育される「子ども」は、独立した存在として子ども自身の性質に添って養育者の助けを借りて自ら成長・発達するという概念である。このため養育者である大人は、教師に比べコントロールや支配が少ない保育者・ケアギバー（ケアを与える者）となる。

このような子どもの主体性、神から与えられた尊厳を重視した子ども本位の「ケアとしての保育」、すなわち、ありのままの子どもの全体性を受けとめ育む保育は、キリスト教保育の目的を子ども自身のエンパワメントへと向かわせるものといえるのでは

ないだろうか。

第二は、イエスの子ども理解の今日的解釈である。養育の一般的理解に比べ、宗教教育における養育は、「神への信仰や宗教的世界観を身につけていくプロセス、あるいはそれを繰り返して教え込む努力」を意味し、イスラエルにおいては旧約のシメオン（申命記6:4-9）に最も端的に表されてきた。子どもはよい教育的環境が提供されるならば信仰において成長し（箴言22:6、エフェ6:4）、宗教的に方向づけられた人物となる—すなわち養育されるのである。

このような、親や信仰共同体に専ら依拠するキリスト教神学の伝統的養育論に対して、イエスが子どもを招く物語（マルコ10:13-16）の読み直しと再解釈は、教育や伝道とは異なる視点を提示して止まない。すなわち、キリスト教保育は、子どもの貧困や虐待が増加し、格差、差別が横行する現状において、社会的弱者、最も小さい者、生きづらさを抱えている者を招き、受け入れることにその中心的使命を持たされていると言えるのである。

〈主要参考文献〉

- 今井誠二「子どもを受け入れるイエス—マルコ福音書における貧困と子ども」『奪われる子どもたち』教文館、2020年
- ウェスターホフ、J.H.『子どもの信仰と教会』新教出版、1981年
- ウェーバー、ハンス=リューディ『イエスと子どもたち』新教出版社、1980年
- キリスト教保育連盟編『日本キリスト教保育百年史』、1986年
- 『新キリスト教保育指針』、2010年
- 『キリスト教保育125年—『日本キリスト教保育百年史』からの動向』、2014年
- 『ともに育つ保育入門』2018年
- 小見のぞみ『田村直臣のキリスト教教育論』教文館、2018年
- 「H.ブッシュネル『キリスト教養育』解題からの考察—今日のキリスト教保育理論の形成に向けて」『聖和論集』第38号、2010年
- 「H.ブッシュネルの思想と現代的意義（1）、（2）」『キリスト教保育』10月号、11月号、キリスト教保育連盟、2015年
- 「教会教育と子ども—日本の教会は子どもたちを招いてきたのか」『紀要』第9号、富坂キリスト教センター、2019年
- 「ソーシャル・キャピタルとしてのキリスト教保育」『キリスト教教育研究』日本キリスト教教育学会、2020年
- シュテーゲマン、W「子どもたちを私のところへ来させ

- なさい—社会史的視点から見た『子どもたちの福音』—」『人間学論究』尚綱学院大学大学院総合人間科学研究科、2018年
- 聖和史刊行委員会編『Thy Will Be Done—聖和の128年』関西学院大学出版会、2015年
- ブッシュネル, H. 『キリスト教養育』教文館、2009年